

へるす・りさーち

No. 62

名古屋市衛生研究所

いんとうけつまくなつ

咽頭結膜熱について

～発熱、のどの痛み、目の充血が現れたら早めに受診を！～

【1. はじめに】

咽頭結膜熱は、夏季に患者数が増える傾向があり、主に乳幼児や児童がかかりやすいウイルス感染症です。発症すると、高熱、のどの痛み、目の充血などの症状が現れます。この病気は、かつては、プール利用時やタオルの貸し借り等により流行する場合があったことから、「プール熱」とも呼ばれていました。現在では、咽頭結膜熱はプール利用による感染よりも、集団生活の場における患者との接触等により広がることが多い感染症として知られています。保育園や学校などで流行しやすいと考えられますが、家庭内感染にも注意が必要です。その感染力は比較的強いので、流行が始まると短期間で患者数が増える可能性があります。本号では、感染予防対策に役立つと考えられる咽頭結膜熱の流行状況、感染経路や症状、注意点、予防法などを紹介します。

【2. 病原体と流行状況】

咽頭結膜熱はDNAウイルスの一種であるアデノウイルスによって引き起こされます(写真1)。主に人を宿主とし、人から人へ感染が広がります。アデノウイルスには多くの型が存在しますが、近年、国内では咽頭結膜熱患者から2型、1型、3型が比較的多く検出されています。このウイルスは環境中でも比較的安定で、ドアノブやタオルなどに付着した状態でもしばらく感染力を保つことがあ

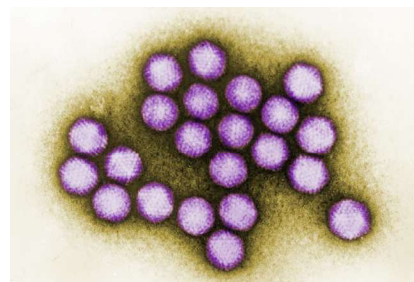
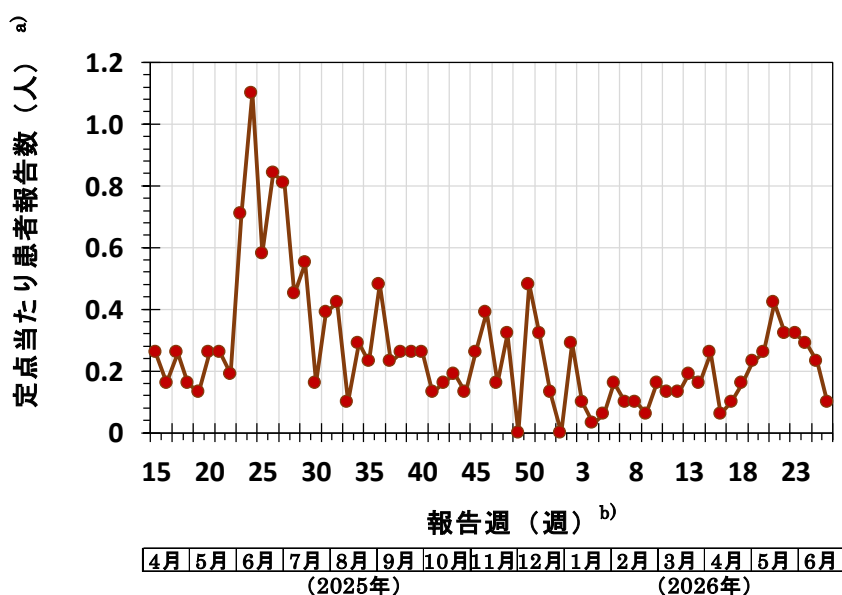


写真1. アデノウイルス透過型電子顕微鏡写真
(出典: 米国疾病予防管理センター)

るため、注意が必要です。

流行時期に関しては、6月から8月にかけて咽頭結膜熱の患者数が増加と言われています。流行の拡大状況を把握する重要な指標となっている市内の小児科定点医療機関から報告される患者数は、時期により変動します。名古屋市における2025年第15



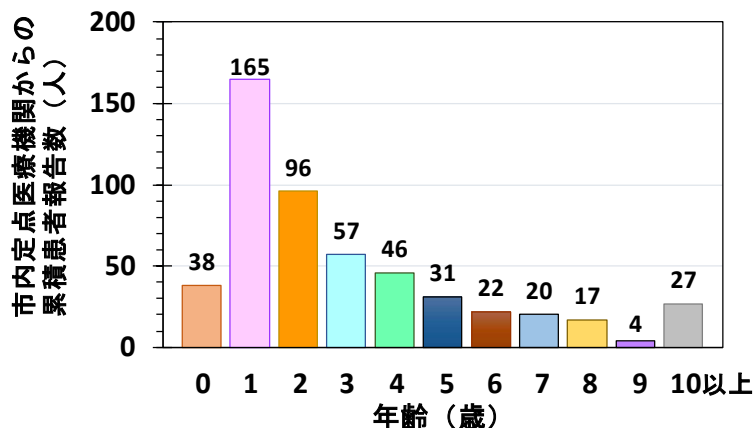


図2. 名古屋市内の定点医療機関からの
年齢階級別の累積患者報告数
(2025年第15週～2026年第26週：計523人の内訳)

週(4月)～2026年第26週(6月)の咽頭結膜熱の定点当たり患者報告数の週別推移をみると(図1)、2025年の第50週頃にわずかな流行がありました。2025年の第23週から第37週にかけて患者数が比較的多かったことが分かります。感染予防のため、その発生動向には注意が必要です。

年齢階級別の患者報告数をみると、1歳児が最も多く、小学校就学前の年齢層において多く発生する傾向が認められます(図2)。

【3. 感染経路、症状、注意点】

感染経路は主に飛沫感染と接触感染です。咳やくしゃみ等の飛沫を吸い込むことや、ウイルスが付着した手指や物品に触れた後、口や目などに触れることで感染します。プールの水そのものが直接の原因とはなりにくいですが、更衣室等における感染者との接触やタオルの共用、手洗い不足などにより感染が広がることがあります。

主症状は、38度以上の発熱(5日間前後)、扁桃腺の腫れ、のどの痛み、目の強い充血(結膜充血)、目の痛みや涙が出ることです。目やにが出ることもあります。これらの症状が4～5日から1週間程度続くことが多く、頭痛や倦怠感、食欲不振がみられる場合もあります。これらの症状が現れた後、ほとんど自然に治ります。しかし、新生児では、まれに重症化することがあるので注意が必要です。

潜伏期間は5～7日程度とされ、発症後もしばらくは便や分泌物からウイルスの排出が続くため注意が必要です。感染力が比較的に強いので、学校保健安全法により、出席停止期間は、「主要症状が消退した後2日を経過するまで」と定められています。「治ったかな?」と思っても、無理をせず、登園・登校の目安については医師の指示等に従いましょう。

【4. 治療と予防】

アデノウイルスに有効な抗ウイルス薬はなく、治療は症状を和らげる

対症療法となります。発熱や痛みに対する解熱鎮痛薬の使用、水分補給、安静が基本となります。目の症状が強い場合には、眼科での診察や治療が必要となることがあります。重症化することはまれですが、高熱が続く、倦怠感がある、目の痛みが強い場合には医療機関で早めに受診しましょう。

予防に関してですが、咽頭結膜熱に対する有効なワクチンはありません。予防の基本は、流水とせっけんによる手洗いとうがいをごまめに行うことです。感染者との密接な接触は避け、タオルや食器を共用しないこと、

目やにや鼻水に触れた後の手指衛生を欠かさないことが大切です。消毒については、アデノウイルスに対してはアルコール消毒が効きにくいことが知られており、必要に応じて適切な濃度の次亜塩素酸ナトリウムなどを使用すると有効です(例：ドアノブ、手すり、蛇口、手拭きタオル、便座、電気スイッチ、おもちゃなどの消毒)。自身や家庭、施設において適切な感染予防対策を心がけ、周囲への感染拡大を防ぎましょう。

